

子どものための日本語講座「さっと日本語クラブ」における 低学年児童対象のアクティビティについて

後 藤 詩 織

1. はじめに

私は大学2年生から、地域の子ども日本語教室「さっと日本語クラブ」で学習支援のボランティアをしてきた。さっと日本語クラブは、毎週土曜日午前10時から12時に青葉区中央市民センターで開講されている日本語教室だ。教室には日本語を母語としない幼稚園児から高校生までの子ども達が通っており、私は小学校低学年の学習支援を担当してきた。

さっと日本語クラブが開講される2時間の中で、低学年児童は3つの活動をする。まず個人に用意された漢字プリントで個別学習をする時間、次に低学年児童が集まって読み書きの学習をする時間、最後にアクティビティをする時間だ。アクティビティの時間、児童達は講師の先生や大学生ボランティア、年齢の近い仲間と一緒に工作や遊びをすることで、その中で用いられる日本語を自然に習得する。

通常、日本語教育で「アクティビティ」というと、学習項目の導入、練習の後に行われる学習項目を定着させるための活動を指す。しかし、さっと日本語クラブは通っている子ども達の年齢も日本語のレベルも様々なため、授業形式ではなく個別学習形式をとっており、児童達は同じ学習項目を導入、練習していない。学習している項目が異なり、日本語習得状況に差のある児童同士と一緒に活動を行うため、通常の日本語教育で行われる「アクティビティ」の形式をとることは難しいのだ。よって、さっと日本語クラブでは日本語学習を織り交ぜながら行われる体験型活動を「アクティビティ」として行っている。

私は大学3年次に1度、教師役として児童達を前にアクティビティを行った。低学年児童を担当する講師の先生のご厚意で、私達大学生ボランティアが考えたアクティビティを実施する機会を頂いたからだ。私達は「ウィンターカードを作ろう」というテーマで、開くと絵が飛び出す仕組みのカードを工

作する授業を行った。一からアクティビティを考え実践するというのは初めての試みだったが、スタンプやビーズ等、多様な素材を用意して関心を引くよう工夫したり、児童1人に学生が1人つくきめ細やかなサポートを行ったりと、試行錯誤して取り組んだ。結果、児童達は楽しそうに取り組み、途中で席を立って教室を歩き回るなどの問題は起こらなかった。子ども達は大人と違い、集中力が切れるとその場でじっとしてられない。それまで何度か個別学習やアクティビティ中、席を立って教室を出て行ってしまふ、突然怒ったり泣いたり感情が安定しないなどの様子が児童によっては見られ、私達ボランティアも日本語教室の先生方も頭を悩ませていたのだった。その点では、実施したアクティビティは成功といえるかもしれない。

しかし、課題もあった。アクティビティの中に日本語の学習が上手く取り入れられなかった点、ウィンターカードを作る手順を説明する際、指示に用いた言葉が子ども達には難しかった点である。アクティビティはあくまでも日本語の学習であり、楽しいだけでは趣旨が変わってしまう。その点では、実施したアクティビティは成功といえなかった。私はこのアクティビティを構想し実践するという経験を通して、アクティビティという日本語学習法に興味を持ち、テーマとして取り上げることにした。

本研究では、さっと日本語クラブにおいて低学年児童を対象に行われている、日本語学習を織り交ぜながら行われる体験型活動を「アクティビティ」と定義し、アクティビティを通して日本語を学ぶことのメリットとデメリットを考察する。そこでまず、さっと日本語クラブの概要と、外国人児童における日本語学習のあり方に関する先行研究をまとめる。次に、アクティビティのメリット、デメリットを明らかにするために2つの調査を行う。1つ目は、さっと日本語クラブで低学年児童のアクティビティを担当している教師に行うインタビュー調査である。普段子ども達を指導している教師が、アクティビティの良さ、難しさをどのように感じているか質問をすることで、アクティビティで日本語を学ぶことの長所と短所を明らかにする。2つ目は、さっと日本語クラブにて考えたアクティビティを実践し、反省と報告を行う実践調査報告である。実際に授業を行うことで感じたアクティビティ学習のメリットとデメリットを報告する。最後に、以上の調査を経て得た見解をまとめ、浮かび上がった課題について言及したい。

2. さっと日本語クラブとは

2-1. さっと日本語クラブの概要

「さっと日本語クラブ」は、毎週土曜午前10時から12時に青葉区中央市民センターで開講されている日本語教室である。開講期間は夏季、冬季休業期間を除く5月から2月で、毎年35回程度開講されている。日本語を母語としない外国人児童生徒、主に小、中学生を対象としているが、幼児や高校生を受け入れることもある。受講人数は20名程度を定員としている。児童生徒を指導するのは「NP0法人ICAS国際都市仙台を支える市民の会」に在籍する子どものための日本語講座担当講師と、大学生サポートボランティアである。

さっと日本語クラブは、青葉区中央市民センターが実施する教育局直轄事業（生涯学習事例研究事業）の1つとして平成16年度から始まった。事業の運営はNP0法人ICAS国際都市仙台を支える市民の会に委託されている。さっと日本語クラブの設立経緯について名取（2010）は、昭和60年代、就業、留学等により仙台市に在住する外国人が増加したことが契機となったと述べている。さっと日本語クラブ開講の目的について石垣（2007）は、在仙の外国人児童生徒に、より充実した学校生活を送ることができるよう継続して日本語学習の機会を提供し、子ども達の日本語学習を支援していくことだと報告している。

平成26年度現在、さっと日本語クラブには幼児2名、小学生7名、中学生5名、高校生1名の計15名が通っている。国籍の内訳は、韓国4名、中国9名、台湾2名である（巻末資料の表1参照）。講師は4名が在籍している。学習サポートをする大学生ボランティアには15名が登録している。内訳は、宮城教育大学が5名、宮城学院女子大学が10名である。

2-2. 活動内容

さっと日本語クラブに通っている児童生徒は、午前10時に青葉区中央市民センターの第4会議室に登校する。

10時から10時35分までは、個人学習の時間である。児童生徒は自分のレベルに合った学習プリントで、ひらがなやカタカナ、漢字を練習する。学習時間中は講師または大学生ボランティアと1対1で学び、筆順やとめはね、読みがな、送りがな、語彙の意味等を確認する。プリントを学習し終わると、講師または大学生ボランティアが丸つけを行い、次のプリントへ進む。進度は

児童生徒によって異なるが、通常1回の授業で裏表のあるプリントを1、2枚学習する。

10時35分から10分間休憩をはさみ、10時45分から11時45分までグループに分かれて学習を行う。平成26年度は、幼児2名と小学1、2年生5名、計7名のグループと、小学4年生2名、中学2年生1名、高校3年生1名、計4名のグループ、それから中学1年生2名、中学2年生2名、計4名の3グループに分かれて学習をしている。各グループには講師が1人ついて指導を行っている。このグループは児童生徒の日本語能力や年齢を考慮して分けられたものである。

幼児と小学校低学年で構成されている7名のグループは、1時間あるグループ学習の時間を前半と後半に分け、前半は読み書きの学習を、後半は工作やゲームなどのアクティビティを行っている。平成25年度まではグループ学習の1時間を全てアクティビティの時間としていたが、平成26年度からは上記のように変更した。アクティビティは、七夕飾り作成等、季節のイベントを盛り込んだものや、日本の伝統的な遊びを取り入れたもの、市民センターのホールで行うスポーツ活動、ビーズやプラ板を使用した工作などがある。また、市民センターで行われるサイエンスフェスティバル等のイベントに参加することもある。

小学校中学年と中学生、高校生で構成されている4名のグループは、日本語能力が異なっているため、個人ごとに課題学習を行っている。中学1、2年生で構成されている4名のグループは、日本語能力が同程度であり、漢字や数学の学習を行っている。

11時45分から12時までは、活動を振り返り日記を書く。講師または大学生ボランティアがその日記にコメントを記し、児童生徒にその場で返却する。児童生徒はファイルに日記をしまい、提出して下校する。なお、以上で述べたタイムスケジュールをまとめたものが巻末資料の表2である。

3. 先行研究

さっと日本語クラブにおいて低学年児童対象に行われているアクティビティ（日本語学習を織り交ぜながら行われる体験型活動）は、どのような機能を持ち児童達にどのような効果を与えているかを、これまでされてきた外国人児童の日本語学習のあり方と照らし合わせて考察する。

外国人児童生徒の日本語能力について川上（2006）は、挨拶や日常会話

など生活に必要な基本的なコミュニケーション能力（基本的対人コミュニケーション能力、Basic Interpersonal Communication Skills: BICS）は1年から2年ほどで習得でき、学習に必要な言語能力（認知学習言語能力、Cognitive Academic Language Proficiency: CALP）は習得にだいたい5年から7年ほどかかると述べている。

同じく外国人児童生徒の日本語能力について齋藤・佐藤（2009）は、日本語を習得するためには幼児期から小学校低学年での支援が重要だという指摘を受け、読みの力は話し言葉を土台にして発達していくこと、そして学校での学習の成功、不成功をきめる要になるのは読みの力であり、第1言語の基礎が固まる小学校入学前後に話し言葉の発達を支える支援が必要だと述べている。低学年児童を対象に行っているさっと日本語クラブのアクティビティは、活動の中で自然と日本語を話すため、話し言葉の発達を支える学習だと言える。話し言葉は日常生活の中で自然と習得できるものという認識が強いが、改めて話し言葉の重要性に目を向けたアクティビティという活動は意義のあるものであろう。

さっと日本語クラブでは主に工作や遊び、また、年に何回かは市民センターのホールを使用して運動をテーマにアクティビティの活動をしている。白井（2009）は、技能教科は他の子どもと一緒に活動できることが多く、運動や表現活動などで子どもの良さを生かす機会をつくりやすいと述べている。これは、児童同士が共通のテーマの下で活動するアクティビティには児童の個性や良さを引き出す側面があることを示唆するものである。

多様な背景を持つ外国人の子どもへの指導について齋藤・佐藤（2009）は、固定した内容を一定の順序性で配列したものを提供するだけでは対応できないと述べた。さらに、外国人の子どもへの日本語教育は日本語の習得が最終目的ではなく、授業への参加を通して学ぶ楽しさを知り、知識や経験を通して自分の生活世界を広げ、周囲の友人と学びあうことで豊かな関係を築いていけるようにしていくことであるとも報告している。アクティビティは、遊びや工作を通して日本語の学習を行う体験型活動である。周囲の児童達とコミュニケーションを深めながら日本語の学びを楽しむ方針で行っているが、今後はより一層、外国人児童にとって重要なコミュニティ形成の場になることを目指していくべきであろう。

しかしこれらの諸研究は理念的であり、実践の場においてアクティビティ

は児童達にどのような効果を与えているか、どのような機能を持っているか考察する必要がある。本研究ではアクティビティを通して日本語を学習することのメリット、デメリットを日本語教室へのインタビュー調査、同教室での実践調査から明らかにしていくこととする。

4. 調査1 インタビュー

4-1. 目的

今回、さっと日本語クラブで低学年児童のアクティビティを担当している講師の先生を対象に、インタビュー調査を実施した。このインタビュー調査の目的は2つある。目的の1つ目は、普段子ども達を指導している先生がアクティビティの良さ、難しさをどのように感じているか質問をすることで、本論文のテーマである「アクティビティによって日本語を学習することのメリットとデメリット」を明らかにすることである。もう1つの目的は、調査2で実践を行うにあたって、どのようなアクティビティが学習に効果的か、授業中どのようなことに注意を払うべきか明らかにすることである。

4-2. 対象・方法

実施時期：2014年9月

インタビュー時間：32分

協力者：さっと日本語クラブにて、外国人低学年児童のアクティビティを担当する女性のA先生

質問項目：

- (1) アクティビティを通して日本語を学ぶことの良さ
- (2) アクティビティに日本語の学習を取り入れることの難しさ
- (3) 子ども達にとって必要な語彙、習得させるべき語彙のカテゴリーとは
- (4) 日本語のレベルが異なる子ども達が同じアクティビティに取り組むことの難しさ
- (5) アクティビティのテーマはどのように選んでいるか
- (6) アクティビティの構想、準備について
- (7) 今まで行ったアクティビティの中で手応えのあったもの
- (8) 今まで行ったアクティビティの中で改善が必要だと感じたもの
- (9) アクティビティの際に気をつけていること

形式：半構造化インタビュー

4-3. 結果

以下は、質問項目ごとにインタビューの内容をまとめたものである。

(1) アクティビティを通して日本語を学ぶことの良さ

アクティビティを通して日本語を学ぶことの良さは2つある。1つ目は、児童達が活動をしながら自然と日本語を話すことだ。そして2つ目は、言葉と動作が児童の中で一致しやすく、習得が早いことだ。アクティビティを通して自ら体験をすることで、言葉を体得することができるのである。

(2) アクティビティに日本語の学習を取り入れることの難しさ

アクティビティに日本語学習を取り入れることの難しさは2つあり、1つ目は、アクティビティ中に使用される語彙は道具、材料、動作の名称などが中心となるため、限られているということだ。使用される語彙が少ないということはつまり、得られる語彙に限りがあるということである。

2つ目は、アクティビティ中に使用される日本語は教科書に載っている日本語よりも、より口語的だということだ。アクティビティは児童達と会話をしながら進めていくため、どうしても口語的な日本語を多く使用する。つまり、教科書で学習するような丁寧な日本語をアクティビティで教えることは難しいのである。それをカバーするには、アクティビティの始めに道具や材料、動作の説明をし、その際に丁寧な日本語を提示したり、児童に読ませたりといった工夫をすれば有意義な日本語学習に結びつくだろう。

(3) 子ども達にとって必要な語彙、習得させるべき語彙のカテゴリーとは

子ども達に優先して指導している項目は3つあり、1つ目は自己紹介である。名前や通っている小学校など、まずは自分のことが言えるよう指導している。2つ目は、具合が悪いときや怪我をした際に必要となる体の部位の名称と、「～が痛い」、「～を怪我した」という文型だ。3つ目は、学校の生活や学習で使用される語彙である。つまり、サバイバル日本語の指導と、学校への適応指導を優先している。

その他には、語彙を増やすための指導を行っている。例えば野菜や動物、乗り物の名前など日常的に使用するものの、通常は小学校入学以前に自然と

身につくため改めて小学校では学習しないような語彙を指導している。指導する際は手作りの絵カードを使用し、児童同士でクイズやカルタをして楽しみながら学習できるよう工夫している。

(4) 日本語のレベルが異なる子ども達が同じアクティビティに取り組むことの難しさ

日本語がある程度理解できる児童は、手順などを1度指示すればすぐに理解し取りかかることができるが、来日したばかりの児童は傍について教えながら取り組む必要があり、そこが難しい点である。

(5) アクティビティのテーマはどのように選んでいるか

アクティビティのテーマは3つの基準で選んでいる。まず1つ目は、子ども達の年齢である。子ども達の年齢が高いのか、幼稚園に通っている子どもが多いのかによってテーマの難易度を選択している。

2つ目は、男女の比率である。年度ごとに受け持つ子どもが変わるため、男子児童が多い年は何かを作るだけでなく、作った後それで遊べるアクティビティを取り入れるようにしている。女子児童が多い年はカード作りなど、できあがりのきれいなものを作るアクティビティを取り入れるようにしている。どのようなアクティビティならば子ども達が喜びそうかということを常に考えながらテーマを選択している。

3つ目は、日本の文化を教えることができるテーマかどうかである。毎回難しいが、日本独特の文化や、伝統的な文化を学べる例えば折り紙やコマ回しのようなアクティビティだと異文化理解にも繋がるだろう。

(6) アクティビティの構想、準備について

アクティビティのテーマは1週間前には決めている。なかなかアイデアが浮かばないときは本を参考にする。手元にある材料からヒントを得てテーマを決めることもある。

何をするか決めた後は自分で1度作ってみる。作ったものはアクティビティの際、見本として子ども達にも見せる。作成した後、どのような材料がどのくらい必要か見積もり、当日までに用意しておく。

(7) 今まで行ったアクティビティの中で手応えのあったもの

好評だったアクティビティはコマ作りである。コマの楽しさの1つは、作った後に遊べるということだ。1人でも遊ぶことができるが、友達とどのコマが1番回るか競争することもできる。また、大、中、小のコマを3つ重ねて回すという遊び方もできる。もう1つのコマの楽しさは、意外性だ。コマにペンで絵を描き、それを回すと絵が全く違う模様に見えたり、色と色が混ざったように見えたりと新たな発見がある。

コマは手軽に作れる上、作った後に意外性があり、1人で遊ぶことも友達と競争し、コミュニケーションをとることもできる。こういった点が上手くいった秘訣だろう。

(8) 今まで行ったアクティビティの中で改善が必要だと感じたもの

一方で改善が必要だと感じたアクティビティは、ペットボトルに装飾を施した後、ビーズを入れて完成させるマラカス作りだ。完成後は皆で音楽に合わせて演奏を行う。作成したマラカスは振るとききれいだが、児童達の反応はあまり良くなかった。

考えられる原因としては、楽しみ方が限られているということだ。コマは作った後様々な楽しみ方があり、尚且つ意外性があるが、ペットボトルのマラカスは振って音を出すという楽しみ方しかない。アクティビティを構想する際には、様々な楽しみ方ができ、意外性を取り入れたものが良いだろう。

(9) アクティビティの際に気をつけていること

アクティビティの際に気をつけていることは2つある。1つ目は、わかりやすい日本語で指示を出すことだ。何を作るのか、次に何を行うのかといったことがわからないと子ども達は意欲が低下し、集中力が切れてしまうからである。2つ目は、道具の名前や動作の名前を1つ1つ丁寧に教えることだ。子ども達に言わせるといった工夫も効果的である。

5. 調査2 実践

5-1. 目的と実践内容

今回さっと日本語クラブに協力を依頼し、低学年児童を対象としたアクティビティ実践を行った。実践調査の目的は、アクティビティを指導者側か

ら実施、考察したときに見えてくるアクティビティ学習の強みと弱みを明らかにすることである。

今回実施するアクティビティの題材は、大学3年次にさっと日本語クラブにて行った授業と同じウィンターカード作りである。このアクティビティは、開くと中の絵が飛び出す仕組みのカードを工作するという内容だ。

大学3年次にこのアクティビティを行った際、浮かび上がったいくつかの課題があった。課題を大きく分けると2つある。1つ目の課題は、アクティビティの中に日本語の学習が組み込まれていなかった点だ。前回は、指導する学習項目を明確に定めずまま授業を実施してしまったため、日本語の学習というよりも、図画工作の授業のようになってしまったという反省があった。もう1つの課題は、ウィンターカードを作る手順を説明するとき、指示に用いた言葉が難しかった点だ。指示に用いる言葉の難易度、わかりやすさといった点に配慮が足りなかったという反省があった。

今回は大学3年次に行ったウィンターカード作りに上記2つの課題、「学習項目を明確に定める点」と「わかりやすい指示を出す点」を踏まえて改良したアクティビティを行う。また、調査1のインタビューにてA先生が「アクティビティの際に気をつけていること」として挙げていた道具や動作の名前を丁寧に教える等の点にも注意を払って実施する。

5-2. 対象・方法

実施時期：2014年11月

実施時間：75分

対象：小学校低学年児童3名 1年生女兒（韓国）1名、2年生女兒（中国）1名、2年生男児（中国）1名

協力者：3名 さっと日本語クラブにて、外国人低学年児童のアクティビティを担当する女性のA先生、青葉区中央市民センター職員1名、大学生ボランティア1名

5-3. 結果

以下は、さっと日本語クラブにて行ったアクティビティの授業を12の場面に分け、内容をまとめたものである。

【場面① 休憩中（アクティビティ授業の準備中）】

アクティビティの準備をしていると周りに低学年児童が集まってきた。机に並べた工作の材料、道具に興味を持ったようで、児童達から積極的に話しかけてきた。2年生男児と2年生女児は道具を指して「～を持ってる」という発話（「この折り紙持ってる」など）を多くしていた。

【場面② 授業開始、自己紹介】

授業の冒頭に自己紹介の時間を設けた。私がまず自己紹介を行いその後、児童達にも自己紹介（名前、学年、国籍）をしてもらった。

【場面③ アクティビティの内容説明、学習目標の提示】

自己紹介の後、児童達にこれからウィンターカードを作ること、ウィンターカードとは冬に友人や家族にプレゼントするカードであることを説明し、作成してきた見本を見せた。今日作るカードは中の絵が飛び出す仕組みであることを話しながらカードを開いてみせると、児童から「すごい」という声が上がった。

その後、今日のアクティビティには2つの目標があることを伝え、目標をひらがなで書いた画用紙を提示した。目標は「どうぐのなまえをおぼえよう」と「つくったカードをこうかんしよう」の2つである。目標を設定して児童達に示した理由は、本研究の5-1、目的と実践内容でも述べた通り、今回のアクティビティは「学習項目を明確に定めること」を課題の1つとしていたからである。目標の1つ目、「どうぐのなまえをおぼえよう」は、調査1のインタビューにてA先生が「アクティビティの際に気をつけていること」として道具や動作の名前を丁寧に教えるという点を挙げていたことから設定した。目標の2つ目、「つくったカードをこうかんしよう」は、カードに一言手紙を書いて交換することでやりもらい表現「あげます」、「もらいます」を学習することを意図して設定した。2年生男児は「あんまりこういうの書きたくないけど」と話すなど、アクティビティに対してあまり意欲的でない様子がここでは見られた。

【場面④ ウィンターカード作り開始、手順1. 好きな色の画用紙を2枚選ぶ】

学習目標を提示した後、ウィンターカード作りを開始した。作り方の手順を書いた画用紙を見せながら、手順1「すきないろの がようしを、2まい

えらびます」を音読し、児童達にも続けて音読させた。口頭で指示を出すだけでなく作り方の手順を書いた画用紙を見せることで、今回のアクティビティの課題である「わかりやすい指示を出すこと」に繋がったと考えている。また、児童達にも音読させたことで読み練習にも繋がった。

手順1を音読した後、実際に児童達に好きな色の画用紙を2枚選ばせた。子ども達は先生や大学生ボランティアと相談をしながら決めていた。

【場面⑤ 手順2. 画用紙を半分に折る】

画用紙を2枚選ばせた後、手順2「がようしを はんぶんにおります」を音読し、児童達にも音読させた。児童達にとって「折る」という動作は日常的に馴染みのある動作だからか、3人とも特に問題なく画用紙を半分に折っていた。

【場面⑥ 手順3. 1枚にはさみで切れ込みを入れる】

画用紙を半分に折った後、手順3「1まいに はさみで きれこみを いれます」を音読し、児童達にも音読させた。「切れ込みって何だろう?」と尋ねると児童達は首を傾げていたが、2年生女兒は「ぎぎぎき切るっていうこと」と答え、2年生男児は「ちよきちよきちよきちよき (切ること)」と答えた。私のはさみで画用紙を切って見せながら切れ込みの説明をすると、2年生女兒は「そういうのやったことある」と反応していた。調査1のインタビューにてA先生が「アクティビティの際に気をつけていること」について、道具や動作の名前を丁寧に教えることだと述べていたが、「切れ込みって何だろう?」と投げかけたことで、児童達に立ち止まって考える機会を与えられたのではないと思われる。

切れ込みを2箇所入れる工程では2年生女兒が早く終わってしまい、「次に色塗る?」と先に進みたがっていた。日本語の指示がすぐ理解でき即行動に移す児童、指示された言葉の意味を考えてから作業に入る児童など、日本語学習歴や年齢の異なる児童1人1人に目を配り、フォローしながらアクティビティを進行することの大変さを痛感した。

【場面⑦ 手順4. 切れ込みを中に折り曲げる】

画用紙に切れ込みを入れた後、手順4「きれこみを なかに おりまげます」

を音読し、児童達にも音読させた。私が手本を示しながら画用紙の切れ込み部分を折ると、児童達も真似して折っていた。その後、切れ込み部分を立体的に折り曲げることで飛び出す仕掛けを作る工程を、先生や大学生ボランティアの助けを借りながら行った。

【場面⑧ 手順5. 2枚の画用紙をのりで貼る】

飛び出す仕掛けを作った後、手順5「2まいの がようしを のりではります」を音読し、児童達にも音読させた。私はこの工程を児童達に「この紙とこの紙をこうやって重ねます。のりでべたんってします」と説明したが、後になってこの説明は不十分だったと反省した。具体的には「この(紙)」、「こうやって」等の指示語と、「べたん」といった擬音語を用いて説明した点を反省しており、もっと丁寧に言葉を補って説明するべきであった。工作をテーマに日本語を学習するアクティビティは、教師の出す指示の言葉が例え不十分で児童が理解できていなかったとしても、手本の動作を見て児童がそれを真似すれば形として成立してしまう側面がある。しかし、アクティビティは普通の工作とは異なり、作品を完成させることが目的ではなく、日本語学習の要素を確実に盛り込まなければならない。調査1のインタビューでA先生が「アクティビティを通して日本語を学ぶことの良さ」について、言葉と動作が児童の中で一致しやすく、習得が早いことだと述べていたが、言葉と動作が一致していなくても成立してしまう側面があることに今回気づき、アクティビティのメリットでありデメリットだと感じた。児童達に指示を出す際には意識的に言葉を補い、理解できているかこまめに確認をする必要があるだろう。

【場面⑨ 学習目標の再提示、目標1. 道具の名前を覚えよう】

2枚の画用紙をのりで貼った後、本日の目標の1つ「どうぐのなまえをおぼえよう」を確認した。目標は「覚えよう」であったが、既に知っているものが多い様子だったためクイズ形式で進めることにした。

私が「これは何でしょう」と尋ねると児童達は道具の名前を次々に答えていったが、中にはわからない道具もあるようだったため、道具を見せながら名前を言う練習をした。

【場面⑩ 手順6. 飾りを作る】

道具の名前を一通り確認した後、手順6「かざりをつくります」を音読し、児童達にも音読させた。この工程は児童達に好きな絵を描かせ、それを切り抜いてカードに貼ることで絵が飛び出すようにする工程だ。

2年生女兒と2年生男児は「先生と同じ雪だるま作る」と言って白の画用紙を選んだ。2年生男児は「えー、雪だるまー、えー、上手くない」、「丸とかあんまり上手くできない」と言っていたが、周囲に励まされ丁寧に描いていた。1年生女兒はシカの絵が飛び出すカードにしたいと言っていたが描く手が進まず、「雪うさぎにしたらいんじゃない」、「お星様でもいいし」等の提案に耳を傾けながら慎重に考えていた。2年生男児も1年生女兒に対して「あとねー木とか」と提案の言葉を投げかけていた。最終的に「今日は雪だるまにする？」と聞くと頷いて、雪だるまの顔をどう描くか考え込んでいた。

2年生男児が、「(雪だるまの)口ってどうやって描くの？」と尋ね、それに対し2年生女兒が「あたしみたいに」と、自分の描いた雪だるまを見せる場面もあった。ここまで児童同士の会話がほとんど見られなかったが、今回のアクティビティでメインとなる飾り作りにおいて、少しずつ児童同士で会話がされるようになってきた。作業をしながら周囲との会話が生まれ、自然と日本語でのコミュニケーションができることはアクティビティの最大のメリットであろう。

【場面⑩ 学習目標の再提示、目標2. 作ったカードを交換しよう】

当初の目標は「つくったカードをこうかんしよう」であり、作成したカードに一言書いて交換し、やりもらい表現「あげます」、「もらいます」を学習する予定であった。しかし想定より残り時間が少なく、カードを完成させるだけで授業が終了しそうだったため、「作ったカードを家族や学校の友人にあげてもいい」と内容を変更した。

2年生女兒はカードを学校の友人にプレゼントすることに決め、カードに「Mちゃん だいすき」と書き、「学校に持ってっていい？」と渡すことを楽しみにしている様子だった。私が2年生女兒に改めて「誰にあげますか」と聞くと「友達のもの……」と、途中まで言って首を傾げていた。「友達の、Mちゃんにあげます」と私が言うと、2年生女兒も後に続いて「Mちゃんにあげます」と繰り返した。カードを誰にあげるか1年生女兒に尋ねると、「まだわかんない」と話していた。2年生男児にも同様の質問をすると、最初は「えー、わかんない。

まだ」と答えたが、その後「お母さんか僕の友達だよ」と話し、職員の方に「女の子（の友達）？」と聞かれると、「男の子かもしれない。女の子かもしれない」と話していた。

どの児童もメインとなる飛び出す飾りを作り終わると、シールやスタンプ、クラフトパンチ、マスキングテープ等を使って装飾を施す作業に夢中になっていた。また、2年生女兒が雪だるま本体よりも大きなりボンのシールを雪だるまに貼ろうと試みた際には教室中に笑いが起き、和気藹々とカード作りに励んでいる様子だった。児童達は先生や大学生ボランティアに手伝ってもらいながら納得がいくまで取り組み、終了時間が来ててもなかなか手が止まらなかった。A先生が1年生女兒の様子を見て、「ノリまくったらなかなかやめられなくなって」と話すと、2年生男児が「僕もだよ」と答えていたことから児童達が熱中してカード作りに取り組んでいることが窺えた。授業の序盤で「あんまりこういうの書きたくないけど」と話すなど、アクティビティに対してあまり意欲的でない様子が見られた2年生男児からそのような発言が聞けたことは大きな収穫であった。

後半はかなり集中していたためか発話が少なく、他の学年を担当している先生に「随分おとなしいね」と言われていた。アクティビティの最大の強みは児童達の発話が自然に生まれることである。よって、児童達の発話が少ない場合にはこちらから発話を促す工夫が必要だという課題を感じた。

完成したカードはまさに三者三様で、授業の最後には作ったカードを持ちながら記念撮影を行った。A先生の「楽しかった？」という問いに「うん」と児童達は答えていた。

【場面⑫ 授業終了後】

記念撮影をした後、児童達は完成したウィンターカードを手に先生や職員、送迎にきた保護者と会話を楽しんでいた。最後に、「みんなにクリスマスツリーをあげます」と言いながら、事前に折り紙で作ってきたクリスマスツリーを児童達にプレゼントした。

6. 総合的考察

調査1のインタビュー、調査2の実践から明らかになった「アクティビティを通して日本語を学習することのメリット、デメリット」を3つずつ述べる。

メリットの1つ目は、活動の中に自然と言語使用機会が生まれることである。児童達が顔を合わせながら共通のテーマの下で作業を行うアクティビティは会話が生まれやすい。また、児童が完成した作品を持ち帰り、家族や友人に見せることで活動の外に会話の機会を広げることできる。アクティビティの授業は、意味のある言語使用が自然に発生するコミュニケーションの場でもあるのである。

メリットの2つ目は、言葉と動作が児童の中で一致しやすく、早い習得が見込めることだ。アクティビティでは、先生が児童に「画用紙にはさみで切れ込みを入れます」とような日本語の指示をする。その指示の内容を児童が理解できなかった場合でも、実際の動作を目にすることで指示に用いられた言葉と動作が一致しやすいのだ。また、自ら体験することで記憶にも残りやすく、言葉を体得することができる点はアクティビティならではの長所と言えるだろう。

メリットの3つ目は、言語学習に抵抗がある児童にも受け入れられやすいことである。日本語を学習する外国人児童の多くは自らの意思で日本語を学習しているわけではなく、両親の国際結婚や仕事など様々な大人の都合によって来日し、日本語を学ばなければならない環境に置かれている。よって、日本語を学ぶことにあまり意欲的でない子どももいる。そんな児童に対して言語学習を前面に押し出したような授業を行うことは却って日本語に抵抗感を抱かせることになるだろう。このような日本語を学習することにあまり意欲的でない児童には、特にアクティビティ学習が効果的だと感じた。その理由として、アクティビティは工作などを通して必然的に意味のある言語使用が生まれるため、言語学習をしている実感があまりないうちに自然と日本語が身につくからである。

デメリットの1つ目は、使用語彙のカテゴリーが少ないことである。アクティビティでよく使用される語彙は道具、材料、動作の名称などが主であり、限られている。活動中に使用される語彙が少ない、あるいはカテゴリーに偏りがあるということはつまり、アクティビティで学習できる語彙に限りがあるということだ。しかし使用語彙のカテゴリーの少なさは、アクティビティのテーマを工夫することで解消できそうだ。例えば日常生活で使用する言葉を学ばせるために、絵や折り紙で品物を作り、その後ロールプレイする「お店屋さんごっこ」や、季節のイベントなどと関連づけたテーマを設定するこ

とで使用語彙のカテゴリーをコントロールすることができるだろう。

デメリットの2つ目は、アクティビティ中に使用される日本語が、教科書に載っている日本語よりもより口語的だということだ。アクティビティは児童達と会話をしながら進めていくため、指示語や擬音語を多用するなどどうしても口語的な日本語を多く使用する。つまり、教科書で学習するような丁寧な日本語をアクティビティで教えることは難しいのである。その点をカバーするためにはアクティビティの要所で道具や材料、動作の説明をし、その際に丁寧な日本語を提示したり、児童に読ませたりといった工夫をすることが望ましいだろう。また、指示を出す際には意識的に言葉を補うことも重要である。

デメリットの3つ目は、遊びと言語学習の要素を両立させるバランスが難しいことだ。アクティビティは遊びや図画工作の中にどのように日本語の学習を織り込むかが難しく、一歩間違えると目的が曖昧になりやすい。アクティビティは普通の工作とは違い作品を完成させることだけが目的ではなく、日本語学習の要素を確実に盛り込まなければならない。遊びと言語学習の要素を上手く両立させるには、ひとえに教師の力量と綿密に練られた授業案にかかっていると見えるが、教師にできる工夫としては児童に学習目標を明確に提示すること、発話が少ない場合には発話を促し日本語を使用する機会を増やすこと、児童達が指示の内容を理解できているかこまめに確認することなどがあるだろう。このような工夫を徹底し、メリハリとバランスを保ちながら授業を進める努力が教師には求められる。

7. まとめと今後の課題

本研究はアクティビティ(言語学習を織り交ぜながら行われる体験型活動)で日本語を学ぶことのメリット、デメリットを明らかにするため2つの調査を行った。さっと日本語クラブでアクティビティの授業を受け持っている講師の先生に行ったインタビュー調査と、同教室で自ら授業を行う実践調査である。その結果、①活動の中に自然と言語使用機会が生まれること、②言葉と動作が児童の中で一致しやすく早い習得が見込めること、③言語学習に抵抗がある児童にも受け入れられやすいという3点のメリットと、①使用語彙のカテゴリーが少ないこと、②アクティビティ中に使用される日本語が教科書に載っている日本語よりもより口語的だということ、③遊びと言語学習の

要素を両立させるバランスが難しいという3点のデメリットが明らかになった。

しかし、今回報告した調査結果はアクティビティを指導する教師の見地から導き出したものであるため、今後は学習者側の見解を含めた調査が必要である。また、本研究ではアクティビティを通して日本語を学習した結果、児童達にどのような学習効果をもたらされたのか明確になっていないため、検証の必要があるだろう。以上の点を本研究の今後の課題としていきたい。

参考文献

- 石垣恵 (2007) 「～子どものための日本語講座『さっと日本語クラブ』～」(平成18年度生涯学習事例研究事業実施報告), www.stks.city.sendai.jp/sgks/WebPages/kenkyu/.../aoba4.pdf (参照2014-10-22)
- 白井智美 (2009) 『イチからはじめる外国人の子ども教育——指導に困ったときの実践ガイド』教育開発研究所, p. 92
- 川上郁雄 (2006) 「学校教育におけるJSL児童生徒への日本語教育」『講座・日本語教育学第5巻 多分化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク, p. 17
- 齋藤ひろみ・佐藤郡衛 (2009) 『文化間移動をする子どもたちの学び——教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房, pp. 9-14.
- 名取由紀 (2010) 「生涯学習事例研究事業実施報告書 (青葉区中央市民センター)」, <http://www.stks.city.sendai.jp/sgks/WebPages/kenkyu/index.html>
(参照2014-10-22)

巻末資料

表1 平成26年度 さっと日本語クラブ児童生徒在籍状況

	韓国	中国	台湾	
幼児	0	1	1	
小学1年生	1	1	0	
小学2年生	0	2	1	
小学3年生	0	0	0	
小学4年生	1	1	0	
小学5年生	0	0	0	
小学6年生	0	0	0	
中学1年生	0	2	0	
中学2年生	1	2	0	
中学3年生	0	0	0	
高校1年生	0	0	0	
高校2年生	0	0	0	
高校3年生	1	0	0	
計	4	9	2	全15名

表2 子どものための日本語講座「さっと日本語クラブ」1日の流れ

時間	児童生徒の動き	講師・大学生ボランティアの動き
9:45~10:00		家庭からの出欠連絡 教室のセッティング 学習プリント、教具等の準備
10:00~10:35	登校 ファイル、個人学習プリント（仮名、漢字）の受け取り 個人学習（仮名、漢字）	出迎え、出席確認 ファイル、個人学習プリント（仮名、漢字）の配布 個人学習（仮名、漢字）のサポート
10:35~10:45	休憩、移動	移動、グループ学習の準備
10:45~11:45	グループ学習	グループ学習のサポート
11:45~12:00	日記（活動の振り返り）	日記（活動の振り返り）のサポート
12:00~	下校	見送り ファイル、教具等の片付け 教室のセッティング ミーティング

調査2 アクティビティ授業風景

子どものための日本語講座「ぎっと日本語クラブ」における低学年児童対象のアクティビティについて



【場面① 休憩中】



【場面② 授業開始、自己紹介】



【場面③ アクティビティの内容説明】



【場面⑤ 画用紙を半分に折る】



【場面⑥ 切れ込みを入れる】



【場面⑦ 切れ込みを中に折り曲げる】



【場面⑧ 2枚の画用紙をのりで貼る】



【場面⑩ 飾りを作る】



【場面⑩ 飾りを作る】



【場面⑩ 飾りを作る】



【場面⑩ 飾りを作る】



【完成】